

金売橋次と五輪堂の由来

原 作 遠藤源八

編著者 遠藤邦弘

平安時代後期(794-1185)から後醍醐天皇(1288-1339)の頃、京の都に三条盛実という公家夫婦がおり、子供に恵まれず毎日淋しく暮らしておったそうです。それである人より不動明王様に願いを掛けて、なんとか子供が授かるようにと断食をした満願の夜に、不動明王様が枕元に立ってお前達夫婦の願いを聞いてやると申されて十月十日の日が流れたある日、目出度く女の子を出産しました。その喜びはひとしおだったが、残念なことにその顔は、女の子のようではなくみにくい顔でした。しかし、夫婦は、不動明王様の授かりものでしたので大事に育てました。

だんだん大きくなり年頃の18歳になりましたが、誰一人嫁に貰ってくれる人がいないので困りはて、再び「なんとか良い婿殿はいませんか」と不動明王様に何度もお願いしたところ、名前は「お萬」と名付けるようにとのお告げでした。お萬の姫の婿殿は、遠く奥州の国、山形県最上郡で炭焼きしている者で「炭焼藤太」という者に婿になって貰い、夫婦になると大変に幸せになり、世の島で大金持ちになる日本一の子供ができるので、是非「炭焼藤太」と一緒にするようにとのお告げがあり、公家様夫婦は自分の家来5、6人を共にして、奥州山形県最上郡方面に旅立ちました。数か月をついやし、やっと山形県最上郡に着いた一行だったが、「炭焼藤太」は移り去っておりました。そのころ藤太は、宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉籠山で炭焼きをやっていました。

公家様夫婦は、京に戻りましたが、お萬の姫様一行は、遠刈田温泉籠山に行くことを決めて、何か月もの月日を経て、やっと宮城県境に来た時に、川があり水が流れていました。どこを探しても、橋もないし困りはててしまいました。どうにもならずお萬の姫様は、着物の裾をまくり上げるのが恥ずかしいので「ああ 恥ずかしや恥ずかしや」と言ったその時、川の水は逆流して無くなり、劇的に川を渡ることができたそうです。今もその地に「恥沢」として名前が付いているそうです。

遠刈田温泉籠山に着いたその時、炭焼藤太は日焼けした黒顔で、まるで「熊男」と思ったそうですが、お萬の姫様は「京から来たお萬と呼ぶ者です。貴男と一緒に暮らし、夫婦になって下さい」とお願い申し上げたそうです。その時、炭焼藤太は驚きあわて、どうすればよいかわかりませんでした。

お萬の姫様はお土産に大判小判をたくさん藤太に渡し、是非夫婦になって下さるようにお願いしました。一緒になった後、無事に炭焼藤太と夫婦になったことを京にいる父上に話すように言って、家来を京に帰えしました。

お萬の姫様の乳母1人だけが残りお世話をしたそうです。米、味噌は山形の方に買い物に出て、大判小判で買うように言われた藤太には、これまでに大判小判を見たことはありませんでした。これまでは、米と味噌を炭と交換して、食べていたそうです。お萬の姫様に言われて初めて大判小判の存在がわかりました。山形まで米、味噌を買いに行く途中に大きな池が今でもあるそうです。その池には鯉がたくさんいたので、大判小判を鯉に投げつけては遊んでいたそうです。その事をお萬の姫様に話したところ「そうしたものに投げてはなりません。大切なお金です。世の中の人が一番大事にしているものです」と言いました。藤太は「こんなもの俺の炭窯にたくさんある」と語り、二人で炭窯に行くとなんと金が山吹色に炭窯にたるしのように下がっているのではありませんか。お萬の姫様は驚いて、こんなに金があるのでは日本一の金持ちになれると言ったそうです。

その後、炭焼藤太は子供に恵まれ、長男を「橋次」、次男を「橋内」、三男を「橋六」と名付けました。

お萬の姫様は、長男が二十歳になったころから金売を始めさせたそうです。

豊臣秀吉(1536/37～1598)は、奥州には金売兄弟がいると話を聞いて、大阪城を作る時に奥州の金売兄弟を大阪に呼び出して金を売るように話したそうです。そこで、一躍日本一の金持ちになりました。それで炭焼藤太も姫様も乳母も公人となり、死して既に遠刈田温泉西裏二十番地の三に葬られ墓が建てられました。

現在では乳母の名前になっておりますが、三名の墓があります。右に藤太・中央にお萬の姫様・左に乳母と祀られております。私の祖父の話では「毎年6月12日をお祭りとして、私の子供のころはたくさんの参拝者が来たものだ。また、子供ができて乳が出ない人は、五輪堂に甘酒を奉ると乳がよく出る」という言い伝えがあり、いまでも参拝する方が絶えません。

又、金成町では、金売橋次の誕生の地として、ガマグチを焼くと金に戻らないというので「ガマグチ祭り」をやっているそうです。

金売橋次の誕生は、蔵王町遠刈田籠山で生まれたのです。三兄弟は全て籠山で生まれ、炭焼藤太の死から金を掘って売り歩いたそうです。

太平洋戦争中に日本人と朝鮮人二千程で金山で仕事をしていたと聞いています。私が兵隊から帰還した昭和20年(1945)でもやっていました。その後たんだん金も取れなくなり、国の補助金でやっと事業をやっていたそうですが、終戦になり金山も閉山になりました。

今、私の父親に渡っていたお萬の姫様の「懐剣」は実在します。

何百年たっても変わらない懐剣です。

私の祖父は、山形県生まれで蛾々温泉に随分勤めていた様に聞いていたので、お萬の姫様の言い伝えはよく分かっておりました。

現在、私(81歳)、父がいれば百二十歳で、母百十六歳ですので、祖父は私が十八歳の時、九十三歳でしたので、現在では百五六歳を過ぎております。今でも山形県近くに大きな池があり、そこには澤山の鯉がいたそうで、藤太は山形に買い物に行く途中に大判小判を投げつけ、今でもその鯉の目は片目になっているように聞いています。

原 作 遠藤源八 1919.10.20～2000.4.10(81歳)の人生録より

編著者 遠藤邦弘 1952生 2008.4.27作成

【蔵王町遠刈田籠山】



【五輪堂】



(伝)金売吉次兄弟の墓

承安4年(1174年)吉次兄弟が砂金を交易して、奥州平泉と京とを往来する途中、ここで群盗に襲われて殺害され、里人がそれを憐れみこの地に葬り供養したと伝承されています。また、後に源義経がここに立ち寄り、吉次兄弟の墓を弔い、その霊を近くの八幡神宮に合祀したと伝えられています。

石塔の石囲いは、元治(げんじ)元年(1864年)7月の建立です。

(参考文献 白河市教育委員会より)

(伝)義経記

「義経記」に、栗原寺(宮城県栗原郡栗駒町尾松栗原浦ノ沢に、寺跡が残る)の名が出てきます。金売り吉次に伴われて平泉めざして来た少年義経は栗原寺に泊まり、吉次が秀衡に報告し、その迎えの使者が来たので、五十人の栗原寺の僧兵に護られて、平泉入りをし秀衡の保護を受けたとなっています。また、平氏追討に出て偉功をたてた義経が、兄頼朝に追われ、二度目の平泉入りをした時も、やはり金売り吉次と共に、この栗原寺に泊まり、平泉に挨拶してその後で秀衡に直面しています。この金売り吉次は、炭焼き藤太の息子とされ、平泉を始め東北地方に、この炭焼き藤太と金売り吉次の話がいろいろと伝わっているそうです。(参考文献 土谷重幸,2000.11.23より)

(注)金田(かねだ)八幡神社

宮城県栗原郡金成町にある金田(かねだ)八幡神社は、炭焼き藤太の長男である金売橋次(吉次)の館跡であるという伝承が残る神社だそうです。この神社に伝わる話として、以下のような話があり、このことから、吉次(橋次)の両親(炭焼き藤太)と熊野信仰に関してのつながりが見えてきます。平安時代末期(1174)「金売橋次信高の両親は、福德で智慧の優れた男児を授からんとして、紀州熊野三所大神を怠りなく信心していると、ある夜熊野の神様が母の夢に立たれて、三つの紅色の橘(みかん)をくださった。すると母は即座に子を孕まれて、三人の男児を生まれた。長男は橋次、次男は橋内、橋六と云う。兄弟はみな健康で美しい若者に成長した。成人して商才にも恵まれ、その才知は世に並ぶ者もないほどであった。(参考文献 土谷重幸,2000.11.23より)

(注)豊臣秀吉(1536/37-1598)安土桃山(あづちももやま)時代

(注)金売橋治神社

平成20年5月5日に金売橋治神社で初のまつり。「感謝込め財布供養」

源義経を京都から岩手・平泉に案内し、藤原秀衡に引き合わせたされる金売吉次(橋治)を祭るため、平成19年11月に栗原市金成に建立さ金売吉治神社で初の祭りが開かれた。財布供養のほか、神楽などのステージもあり、祭りを盛り上げた。(2008.5.6河北新報)